東雅
七

東雅巻之十一

器用第十一

筑後守従五位下源君美撰

鼎 アシカナヘ 倭名抄に説文を引て鼎ハ三足両耳和五味之寶器也鼎ハアシカナヘといふと注せり鼎をアシカナヘといひ又カナヘといふ古語也古には竈をよひてカマといひ釜をよひてカナヘといひ鼎をよひてアシカナヘといひしなり釜と

カマといひ竈をカマトといひ鼎をカナヘといふ

とある後の證に出しアシカナヘといひ足之

三足ある故之カナヘ是は金之納続之地名之

へ是は上古俗凡器を呼ひし惣名之数覚證く

イツヘといひ瓮を謂イムヘといひ大瓮を謂く

ホノヘといひ瑞をナヘといひ罐をツルヘといひやしき皆

是之後これに倣ふへし 古語に凡物の間隔あるをヒといひ又日本紀に間謂く

ヒといふを瓮と通し物しくへといひメともいひ為
て點茶の器をもいふへしといひしもち水火の器ある
をいひきり 櫃横の器をヒツといひ 瓶甕之属をカメとい
ふを叢をとれる事なり 向陽の字漆工ヒニヘタテ名を読
むまて 甘蒸はやく
あらく

釜 カナヘ 倭名抄に釜はカナヘ一同に口カナヘといひて
記しるカナヘの訓は鼎の類に見えたり口カナヘとは
其腰下の象なるをいひ 釜はカマといひ竈をカ
マドといふなとは總の倍より出たり 古すれ竈を
カマといひし

と後代釜をしらくカてしたりし返す竈をはカてトといふ
またカマトとは竈殿の儀あらしされしたしたを
焼かなる竈瓦を焼ける竈なりといへるカてといふはこときは
かの古紙の書なりし釜をカてといふはこときハ語也と云
又やおいらんぬ又は朝鮮の作釜を
もしくカてといふなり

鐺

サカリ　倭名抄に四声字苑を引て鐺は似釜
而大足一云小釜也　漢語抄にはサカリといふ　俗
には懸釜の字を用ひしはサカリと云下に
その下に懸くべきといふ
釜壊の盧をも俗之ゐ
てこそ割れ同しかくし古く割

鑊子ハ煖酒之器也と注せり此注は何ぞ
此の注は鑊子を漢字和名のまゝに注也
と見て今煖酒之器ありとせば今俗
カミナヘといふものの類なるべし又云煖酒の器を加
カミとは温罇といふ或はカナヘといふ 二十八といふカミナヘ
へといひしなるべし 術の牀してカミナ
鍋 アミナヘ 倭名鈔を閲して按ずるに漢語抄
又アミナヘと云と注せりアミは足之形をカミナヘと

いふなし六十律は強ちに論ずれば作構事是亦
不窮を見てり今此に記さじ制を見よ

譜

凡十八條名調之度式を以て綫譜は十八とす
法とす無名主調を以て譜は十八と云令如
また今全調之譜尾調之譜字或は逸張と法
しるす十八とは五線の中を以て十とし首記
線の中の字譜て十といふなり之（とは間に隣也）

さる中は虚空の物を陽なりと云之凡十一と云
ことの名には社衡へし蝕もひく力十一といひしに
廿一をもて作れるものなり日本紀に融化字
治て十一といひしに風ちるものをいひしにそ
此地の始も土一をもて作りしより起れるに地
わろくき外にぬことおもに十一をもて作出るとの
土陽といひそ陽をけ十一といひすまにうりぬ

ものあり古よりあしらのまゝ洋ろうまでをえらむると
焙ますをホイロとおもていふ尤火也之を火を焙く
文の如くすゝといふホウロクとはホイロの焙口を云く
は焙を呼ひくケとひきしいふ焙の物也之下字集焙
焙の字焙てホイ呼といふも漢音をもて呼ひしなるへく
これハ火炉の形別て一物之

銅鑼 サフラ俗名也又云鐃鈸銅鑼之訛
鑼音與沙羅同俗云沙布羅今按或説云銅
羅今按云銅羅也後人訛之鈔羅者銅之
訛也此説未詳と雖もサフラともいふもこれ

新羅の方言に羅ハ涼羅也新羅をよハ城
なれハ鮮卑の語なるを出す倭訓にサハリと
いふハサフラ城邑の称しるを倭名抄又別に金椀
を載せ源てカナマリといひ日本霊異記を以て
椀の字倭訓カナマリといふ字亦おふ詳古論
椀名未利金椀の字を用ゐても見し又り
新羅金椀鎮人を新羅といふ字の頭よりいふハ

カナてりといひサフラといふものならん異名ね

又はあまた歌書にしてカナさりといふもの彼書よ

してサフラテといひしカナトいふハ金也といふハこれを

いふ銀の称也みくも飛れ象有をいふ也銀字

銀てさりといふが如きは畫異記に見えしれとも

あれは本記に玉銀の字銀て又こてりといふか

こくいて銀錦くてりといふ歟にも不詳　銀はもとこれ　割の同字也

日本紀に借用ひく読くたりといひし也是また所見なき
とそとすゑうら見えね

鉢

ハチ梵名波多羅を応量器と翻す仏道者食
器也胡人謂之盂今按和名抄為名之鉢
此器梵語にて波多羅といひしを漢に鉢
して鉢盂とはいひけり此方にて僧家におなし
く乃僧の盤盂に鉢とよふ物をは鉢とよ
今俗に鉢といふものは不まさらんも僧の首をも
鉢といひ脳蓋をもいひても鉢といふも抹額をもいひて鉢

巻といふことは又こゝろえなるへし續字彙に盧盂原

これ柳之乃漉首瓘曰盧と見えたりされは彼此も首瓘

とよむへけるの假名同しかるへし腦蓋をよみて卽と

いふことはたゝかしこれ首瓘ふまれていふへきなるへし

已上金器

椀

名義假名わんは漆器の總名なるを同く碗椀

有脚器也字与盌同亦作鋺今按無和名俗

称其名を須世ず當世も銅器之假名わす

るは漆器とみて後人誤りて久九といひしなる

並に古文不詳　後俗にまゝ椀の字を用ひし
酒器とおし混ひす椀は日に
椀をもしられ無楚之筆に同しくして酒器にかなは
かくいへる字木に从ひ缶に从ひぬるよりて後用ひし
後ひす金のことくにして
酒器とはなしとあるめり
まゝ倭名抄に蒋魴切韻に椀を酒海とし
いふ本椀なる俗所用鋺し酒海と又呑呉るを
得しるさされ此の比かひ酒海といひしか
漢といふ下とは設に同しくうれ
倭名抄に八酒海
大漆器也

なり延喜式にも内匠寮にて酒器を造る朱漆な
れ料注文見えたれバ是漆器なるべし或は是
古制丸器なりなどいふはあやまり古の内ツホといへるもの
これも本をもて造れるなり瓦をもて造れるもあり
土といへるものこそまことに瓷をもて造れるなり瓦をもて造
れるなりこれらを名目にしけれバまた賞にみえたり
酒器のはじめも木瓦の二式
ありしなるべし

壺

ツホ倭名抄漆器の部に周禮注を引て壺は
以木爲之飲器也しかして瓦器の部に揚氏漢
語抄を引て壺は以木爲之今按するに木作之

瓦埴之類を収せり甕といひ埴といふ古制たきく
つされいつれも後々も其の名あるといひしにて

壺

見ゆるも古く俗瓦地の形名あるとしるく
つほといひつるといひ瓮ゆくつぶらといひ精
瓮ゆくつふといひ水瓶をもつといひ草本
こ瓮甞をつきといふかりこと皆並ゞ甕の
こと瓶も古く後つふといひたる日本紀に甕は

も御器漆器之其制のこと不詳 盤俗にサラと いへり是ハ
みえ
たり

畳子 窪ニヌリノサラ 俗名物よ延喜式ニ飯椀羹椀

畳子名つといふ畳子と楊氏漢語抄ニウルミヌリ
ノサラといふ也御器食合の朱合は今椀まりを俗よ
謂る朱漆合子として畳よ合子等此制のこと
今は専らこれ等の俗に椀といひ御器といひ入と

いひ合せしやすのことさこそ造制と見ゆる

大祭タイハイは倭名抄に延喜式の大祭は新式より以来

漆壺祭忌漆壺祭之と注せり今の壺祭

に大山津見神の女とあり机代物を捧しめ

皇孫の詔をうけて見えし机といふものの此物

婚とて見えしも南山史筆とて殺生の人合は

盤俎なしなと見えしはいまそ御膳をうりたえ来

あるへし

箸

倭名抄に筯ははし字亦作箸唐韻に筯ハ匙之ところ也匙ハカヒ薬名苑にヒ一名は匙といひ説文にヒは所以取飯といへり箸をはしといふは嘴にて食をとれるゆへ鳥嘴のことくなるといふてまたはしは端也古へは細割竹の中を折まけてはち端と端とをむひ合せて食を

已上漆器

瓺　ミカ

甈　サラケ

倭名抄ニ酒器として瓺をミカ甈を
サラケ今按ずるに甈字不出未詳兼名苑加之
大甕をミカといひ瓫甕をサラケといふと注せり
ミカとはミカ源順源山清ミヤニ古源ミカといひ
とハすのミし
ーハヤクといふ義と合はひしミヤクは瓫之名今

俗に瓷器とよびて焼物といふかたく瓦器よりも
深きをいふ也サラケとはサラは浅也（浅をアサといふ　アは発語の
詞也）古語にサといひしを細也小也狭也浅也サラといひしを
まぎらはしこれ詞のゆゑなり
ケはカといふ詞の轉せしにて瓦器よりも深きをいひ
しに甌の字はもと我西洋説文の俗創造
ならぬもまたあるへし凡唐説に凡物此大なる
甕といふへき人云さり

游堌ユカ 倭名抄に唐韻を引て堌甕也 楊氏漢

語抄に游堌はユカといふ 今按に俗人大桶を

いふユカヲケといふ是無実之謬也 ヨホミカといふ

と語ちり游堌語くユカといふは字の音をもて

呼ひしくヨホミカといふはヨホは大之ミカは大

甕也 俗に大桶をユカヲケといふはユカは甕の

扱めく大ちりりものをいひなは大桶をも亦かくいひ

とかくいふ 又今俗に江戸の大桶をヲホユカタといふはユカタケといふ詞の轉訛せしと見えたり

甕 モタヒ 倭名抄に揚子方言を引て甕罌瓮の字

を讀てモタヒといひ甕亦作甕罌亦作甖と注

せり齊手抄日本紀のはしに甕讀てミカといひ

又建甕槌神天津甕星等の甕の字を

讀もすれど紀註之さしも上古の時總てはあれて

ミカといひしを後世の俗に製の大小によりて名を

此時いまた和名なかりけるにやモタヒといふ名は
こゝにも不詳 上の瓶子の條に保昌か説にモタヒと云はモタはおけることゝいふ名の権輿
しけるへきとおもひしは 似たり

瓶子カメ 倭名抄に楊子漢語抄を引て瓶子讀て
てカメといふ又後世カは甌字をカといふの
ごとく此瓶のごときは假名文字にもいひ
なり（へいしといふは 瓶の音なり此也）瓶子胡瓶などいへるにや

古語に罡とかくといひへといひ
又といひしは鼎の注にみえたり

盃　サカツキ　倭名類聚抄に方言注に盞亦名盃

注く盃一名は巵盃之最小者曰盞盞並読さかつき
きといへるは坏なる飲器未成たる杯也古は經
は酒盞を杯字相波といひ巵　曰不託は飲器俗号
盞曰淳ねとまうされたり
さかハウキなといひしは飲器の方言よりおこりしとみえたり
うきハといひしは八器也古語酒をも䉼にて飲むなり
御酒ノ柏といひしはうきハさかつきにて盞もと淳之解にて坏桐器
本此語にみえたり

サカツキ盃は サカハ酒之ツキは古陶瓦器を呼ひく
ツキといふ事杯盞杯等也ことに此之後陶瓦器の
字を添てツキといひ下器添てカツキといひ窪器
添てソホツキといふかことさら之條名称と見えし サ
カツキといふものも今此ことく漆器多きものをといひ
しかはあれは今もカハラケといふものこそカハ
ラケといふカハラは瓦之ケは笥之 古くは凡そ食

をもるものを呼ひて笥といひけり俗に坏土器
を坏とかくカハラケといふ也（ツキとよむ 古語に器をツキといへり）今といひきといひしは土をもて
作れる器なるをいひしに似たり古器の字形をとるや
しらひめし後俗もこれによりて凡て器をしてツキ
といへり 後次湯次などいへれ又まゝ埦の字読く
サカツキといふは今瓷器すなはちチヨクといふものなれ
埦をしひてチヨクといふは福建及ひ朝鮮の方言なる
なるを俗彼方言のまゝよひし

盌

一切経音義に説文を引く盌字亦作椀小
盂也兼名苑に一名をはといふ俗には毛ヒといふと

須セリ六月とは余し秋羅の須に見えたり
モヒといひしは和泥に武烈天皇紀に
見えし影媛の歌に玉笥には飯さへ
盛り玉モヒに水さへ盛り泣そほち行くも影媛
モヒといふは水盛器にて盛ひ水を盛と
いふことえたりさては椀と伝ふモヒとは
夫をモヒとは盛るモヒとは盛る笥に盛り

飯に並へて地を営りのなをといひし
万葉集抄には モヒとは茶椀之といふ
また武に延喜式に片椀と見えしは唐
陶器といふと見えたり此物陶器
又は瓦器にて焼しのとし玉椀といひ今
鋺といふものありて陶の葉椀にくクホテ
といふ物をわせて古の陶瓦器とみえし椀なり

とはみえたり延喜式に見えし古は土器なりしをは鋺形と書きれしこと今にしも坏まりは漆器ならず瓷器なりしなり椀の字はもと漆器にはあらず古へ飯椀羹椀は瓷器なり此の土器には酒瓶ある器もあり
椀といふもの土にて見て今俗に飯椀といひ汁椀といひは古の大椀中椀小椀ときのの是を平皿にいひ古の盤のこの事と坪皿といふは古の宗坏なるべく
箸といふものは古の箸形菜盤といふもの延喜式に見えし

漆器ハ大椀径八寸六分深三寸中椀径七寸八分深二寸盤径
八寸宦杯径五寸深一寸五分又茶椀ハ急須しものと需ても
笠形茶盤をもちゐすなはち見えたる茶もちゐる百餘年おれ
此器といふものと見るに今のすくなきを所々にしるしおきぬ
中の式ハ見えし所ハおもしろき椀の字をかくワンといふ
宋世の祥法頭までも僧の手みても宋国の吉の時よ
り入今までいひしものとし
塵添壒囊抄ニ見えたり

盃

ヒラカ 倭名抄ニ瓦器類と引く坐ハ瓦器之字
亦作瓮 毎夕盆 然ハヒラカといひ俗ニはホトキと
いふと須恵器の紀古事記ニ見ゆ 椀八主ト

御座之垣とかく天之八十毗良迦を作りし
ことみえ又齋部記ニ神武天皇天香山の埴を
とりて八十平瓮天手抉八十枚嚴瓮を作り給ふ
とみえ古語拾遺ニ天八十枚加とみえて日本紀
釈ニは平賀者瓫瓶缶之土器也とみえたれ
此ひらは平也らは器をいふ也かはらけ也瓦器の
といふ也ひらは漢ニ瓮と見えていにしへはホトキの

鹽

英ふ洋 ホトヽ花 勝といふてきは瓮とそこ形の
窪かなるものといひしとみえたり
傳に嚴瓮謂にイツヘといふ日本紀には凡
嚴瓮は祭祀に用ひし器の名とみえたり崇神
天皇紀に忌瓮とも嚴瓮ともに記せり
イツといひイムといふ並に其の例へといふも
瓮之今俗に然そいふもの又類聚名義抄に
則瓮なといひしよりはあらし 日本紀に傳へ 嚴瓮を紀して

今按するに瓷は瓷器にして瓮は古瓶にといひたり瓮はつれ瓮之瓮は瓶とは地名にして此後の書にはあらへせとものはおほかれ共縦にイシへやきといふ事ぞとなりし焼瓮也又古瓦器としてスヤキといふも又は陶なりやきは焼也陶器の字読べく

盤

スエツキともいふべし

サラ 倭名鈔に皿器を以て盤を器名之といひ又古訓の事は紀に見えし古言はサラなりしを瓦器の浅きをいひたりしを後の人皿の字を読むなり又古書に盤の字を読

しかるにふるき日本紀には盤の字をよみて
ヒラうといへり釈には柏葉盤なりといへり
これを按ずるに古は俗の飲食の物盤は葉
をもちてこしらへしゆゑヒラうといへりよなるへし
其後にはよ代々木の器をもちてなり
またサラといひしかは盤文選にサラとも
よみえ今はこれを皿と磁楪漆楪なとゝ呼ひて

サラといふ物をあまして盤の字讀てサラと
いふすなはち史にも凡今の俗盤をもて字義となし
ときは凡器の称となれりサラと
いふ物を盞といふ搽楪之漆楪之まゝ楪子とかくチヤ
ツといふものを漢字をかくもかし

瓷

瓷ハ俗名物ニ瓶額をいひ瓷ハ器之俗ニ
瓷器をいひてさしノウツハモノといふをはさる
この字の音をかくなひしとみてさう瓷茶碗
ふ依も丹昔京瓶といふすなは秋して或説ニ

崇神天皇の御世に和珥武鐰坂にすゑし
忌瓮はアヲニとされて書紀古事記と
はいともとアヘ免すこし此流のまくなれは
我国の瓷器国史の説にかくしても古の
時はことに多く後の俗もかくいひしは
もろこしの書にはかゝれとことに流の物し
よりけしきさまへつれ 古にて瓦器といひしを 今俗に大やきといふもの

鑵

ともみく御けと用ひる瓷しかその名御けをと
用ひしをのといへり
ツルヘ倭名抄瓦器類に唐韻云く鑵を
汲水器也楊氏漢語抄にツルヘといへる汲ミ
日本紀には瓶此字を読てツルヘといふ後俗又
綱瓶の字を用ひて読てツルヘといへり ツルヘとは ツルハ縄
其後繋をいへり 民器之故綱瓶二字を用
ゆゑに和くは綱を読じ手訓のこと瓶を読むも旨
れまじいふ也湯桶読きく
あるなり

已上瓦器

棬　サスエ　倭名抄陰詞切韻考聲切韻等を引て棬を
器似升屈木為之可知せり　サスは挿
エは桶也　屈木為之といふ事今俗にてケモノといふ
いふ物にて湯桶抔にいふものなり　杉の木にて宗　此民にては
汁物をもり酒器を
もりし

笥　ケ　倭名抄木器ニ載て礼記注を引て笥を

盌合に器也と注して和名の俗飯と號す
器をもひくけといひしまりの漢といふ也
こゝく竹器也とは見えたれども字書盌合ニ器也
と見えしをとかくに注さくかゝしきこと注文ニ曰
小飯の食
器にて食器をは竹器也　さて倭名鈔ニ曰
四聲字苑と見えたり
さては木器則ち盌なりし　飯を盛る器を
もひくけといひし義ふ詳古俗余をいふ

ケといひけるされも食の字亦讀ケといふ
饌讀ニアサケユウケなといふも朝飯夕飯之と
いひしことなれ之事 康治 食紙賀地ニあれともさ冩を
もあるにケといひけれ當ニ賀つ而あれ食と
もまうしケといひしや詳ならすとは志りにて
また倭名鈔ニ糧ヲ漢語抄ニカレヒケと
いふ倍ニ而泥破ヲこれあると泥せりきこと破ヲ此

こと器をまうけとはいひけるに飯器をけといひしものゝ多くなれるか
中古とのいひしを飯を盛る物といひけり然して凡器を呼
ひけとなりしならし　これ飯を盛る器より起れるなれは
多くを家にあれは笥に盛る飯を草枕旅にしあれは椎の
葉に盛るとよめり　延喜式の内匠寮式にいはく　作れる飯器
の所飯笥は径六寸深一寸七分と見へたり　壒嚢抄に飯器を
はるを飯を笥に盛る義なりと見えたり　然れ今も志るふ
やまといにも割籠やあふひいます
ぞ詳ならすとやすらん

俎

マナイタ倭名抄に史記に見へし刀俎此字を引
て俎をマナイタ用之式云食刀切机各一以今按切

机とは廻之と傳せりてけるは魚之イタと
いふ板之乃の魚を割く板なりといふ之 倭名抄に割の訓
なえへは倭名には庖丁といふ 莊子に見へし庖丁のあまより
く宰割と称ることのを庖丁人なといふにも是より出る刀の力
とも呼ぶく名つく
ありといへり

麩杖 ムギヲスキ 倭名抄に奇多麦のとしらく行

麩杖はムギオスキといふを傳せりこれ今俗
にムギウシといふ是也 又俗に麩株とも云ふなり

酒槽 サカフネ 倭名抄ニ酒槽讀てサカフネと
いふ木にて作りて酒船と志るせり 酒槽を以
ひくサカフネといふ字も同義なり 陸ニ久ミて
るゝ 槽をフネといふ器也と記
おの舩也諸書に見えたり

桶

ヲケ 倭名抄ニ麻笥 切韻を引て 桶をヲケ
汲水於井之器也 俗ニ火桶 水桶 菜桶 膝桶あり
名あり とはせり ヲケといふは 麻之ケ笥之

延喜式に麻笥と書るハをけのことなり
此れ績麻笥より起りて水火の桶此をも
なとも皆いふなりとおしなへて製作の名となりて二
式あり板を合せて圓となし束ぬるを竹篐
とめくまるに木組屋めくり圓となし縫めて
樺皮をとめくまるに桶は底を下に設る也

杓

ヒサコ 倭名鈔に瓠を訓て 杓をヒサコ訓ず

器之瓢也ナリヒサコ瓢之匏之可以為飲器
者也とあり延喜式鎮火祭祝詞伊佐奈
美命火結神子焼まして石隠ましてなる御子
水匏川菜埴山姫四種の物を生たまひて
此心悪しき子の心荒ひなはこれをもて鎮
奉れと教悟したまひきと見えたり又
匏之以下古事記日本紀等に天互當讀

てアテノヨサツラといひしのみにて古
く語これとも詳かに器となれるといひ
ばこれなとみてフクヒサといふをヨサといふこと
古語にヒといひしを今にコといふる子也
ツラといふを蔓之古しはヨサツラといひしは
後にヒサコといひしを其後人瓠に倣ひ
く杓を造り遂に杓をはくヒサコといひし

こともヽ後の人瓠に依てひさく杓を造りて逆に
杓を呼てヒサコといひしかは瓠をはヒサコと
いひしなり是は孔生之 抜火孜猶に火鉢を抜めいふ 杓のものをヒことよひ
いとふ火を杓々水を流を沉とめすといふ水井
是は水之垣山非をはさへ瓠を瓠瓜之川菜を和名抄に
川菜に若菜之字を読てカハナといふ依て和名へ是も之を
依にスサなといふものこれスサをは川菜のことき故集
といふに似たり又俗にヒサコといふは柄杓二字を用ゆり
古川とは今之呼ふするをいへといふ瓢瓠の二字
を用ゆるものはなし　又俗にひさくカヒナといふをかヒヒに傳写柄ナ両
之ナは箇之古俗器をよふの名なりその柄あるの器

ちりと
以ちう

臼 ウス

杵 キネ 倭名鈔に四声字苑を引て臼はウス
舂穀器也杵はキネ舂擣也と注せり案と
はウスは大にして窠のことくなれは漢に窠臼なと
いふかことくまさ形の多く窠のことくにして大
きなるをいふへきをは上古此俗に搥とも称

とはひへきといひしは木之出雲坐杵築社と號
詠之可見まて集る皇く杵築也ける
然るかくいひしとこまか記るりしの
ま人紀之子を根之上古に信すといへし
その夢中根なるといひしをもおもは
根椿之末を椎根といひ此に良木公冑
根気といひしかとるき此之この代には巻りには

句のほうハ小歌といはれ採吟して拝歌など
をはるまて俳諧造とて句ニ露名あらす
みちあるをか此等ハ古事記日本紀等ニ
見えたり私記ニも詳ニ載して侍
其樸人の歌ニ樸句といふもあれハ見え
タチウスといふものも古きをしも見え
なり

碓

カラウス 倭名抄に陸詞切韻を引て碓はカラウス踏舂具也とあり 孫愐切韻に碓は碓と碓程とあり今按俗にいふ米口を搗と訳しより我ホく碾磑なと云舂の俗器徴に始まりとみえしこれを碓とも唐臼とも称すより係りし称にカラウスといふはひしけり 古事記に景行天皇の皇子 大碓小碓の二王同雙生

あくれるしゆゑしと一夫皇是しとあひ
雉は諸ひなひしまよくかくれ名つゐや
名
せしと見えしことほはこれの字借用く
語くウホとつひしぬるとおくそ代はカラウスと
いふとの名としるはあらし程語くホロヽと云
義不詳とは借まサホといふすの無之　雉程まうきゝ　雉鳴ゝ字
と聞ゆる之ホロヽといひしは拂ひの方乃ゆ
出ぬらん雉當はちるみさうきる之

礶

スリウス　漢名抄に蒙求苑を引く礶はスリ
ウス磨礱之と注せりスリウスは磨する
ウスといふ今俗にスルスといふもの是れ也之
日本紀推古天皇紀十八年高麗貢上僧
曇徴善く碾磑を作り蓋碾磑を造る
こゝに始まりと志るされし碾磑読みてミツウスと
いふ新字は碾磑を水碾之と注せり今の

水車ハ用のところに碓と磑との二式と
碓ハ穀を舂き磑ハ物を砕くことを
就ても名異なり令義解にも碾磑ハ
水碾也作茶曰碾作麪曰磑とあれバ
されど古ハ何ミツウスといひしハ水磑之水碓
をいふにハあらで元ハ磨礱を制するものなく
作り方なく造られしことを確も不

まるい名是之

碾は磨上の時スウハウスといふ
ものなり 磑は磨下の定石なり
ヒクウスといふものなり すなはち麪を作る器なり
今案解の説 碾と磑とをもちて二式とす いへ何
るへきは碾は茶にはすへし 茶研は倭名抄木器部に
茶碾と倭名茶研といふ並読てキシルといふと須知之

甑

コシキ倭名抄に 蒸餅切韻を引く 甑はコシ
キ炊飯器也亦た年久立成器をいへり
甑帯 炊箄並読てコシキワラといふと須し
へつきもい飯箄読てイヒシタミといふ

ものゝ甑底を蔽ふ所筐なりとみえて
なり
古説に飯を炊くといひしは於今従く
飯をタクるといふものにして上世の説に
カしいひしを燒なり　詳に竈の條に見えしなり
シクといひしは物の甑をこしきといひしきはあ証
當といふへし　古説にナトといひきといひしは當なり
今俗に蒸籠と唯ひくセイロウといふわりまく邑
甑の屬之

已上木器

箪　イヒミクミ　倭名抄に四聲字苑を引く箪蔽

翫　唐竹箋之漢語ニて假草後ニイヒシ
タミとしてを隠してシタヽ此義不詳　今
假ニイカキといふものを　良假名之イカキ
といふこと記も不詳　假名ニ　唐竹筥のシタヽ
　といふもの有シタヽ此義詳
からば或人の説ニ假草を今假ニコヽキスといふもの
なりといふ也イカキといふことを記を　史斗をとかきと
いふこと〻假名ニ〻を
いひしとみえたり

筏ハ離　今キスリヒ　假名ニ　無父ニ俤を別く

箍䉶ゟ麦索黄荒なり以竹編為之揚子
漢語に玉ムキスクヒといふと注せりムキと
は索麪をいふなりスクヒとは玄に七（倍）おれ
するをスクフといふ也下学集に箍䉶を
味噌漉也と注し夢に（サ）ウリイカキと注せり
サウリとはさ字は音似通ひして又イカキ
といひしを見れハ今のこと延ひあり

れあすなくこれをサルといふサルとはサウリ

といひし語の約し訛れる也

篩フルヒ 倭名鈔に説文を引て篩はフルヒ

除麁取細之竹器也と記せりフルヒとは振之

こを轉化して用をなすをいふ也 今のこれハ竹器にあれ絹をもて

底とかれキヌフルヒといふものある毛をもて羅とかれ

スイノウ毛をいふありキヌフルヒといふのハ漢に羅合といひ

羅斗といふ二式あり スイノウも佛氏のいふところ漉水

嚢の音割略して漢に篩といふ物の名也

箕も倭名抄に須美といふ箕はミ深嚢歟
箕之冢之と注せり袁次に出る又横刀とあり
鉤とかし一箕は智りく見ゆるに似べし
かひしといふは目印に見えしか彼も因果
起る時は久しきものことといふ是不祥
ミとは皺といふ総の物なりや古語にヒといひこと
いふ有おもしていひなり皺語くヒといふは瓢之
瓢語くヒとはいふこと也
ニなるらり

箒ハヽキ倭名抄ニ箒篲並ニ讀てハヽキと
いふ是彦瀲尊を誕生し日海濱ニ室を造れ
ニ掃守連の遠祖天忍人命作箒掃蟹と
いへり古語拾遺ニ見えたりさてそれより始る
彼命の始造なりて不易之我國の俗掃除
をといひくハクといふそハヽキはハキハラ之
倭名抄所載ものニ考聲切韻方言注等を引て

筐廬方上斂者為籮ニシタミといふ籮形よ
而高者為篤漢語抄ニアシカといふ今按
文用簀字と返せりシタミとはアシカと云
並ニ義詳ならず但今ニ行るゝいふ
その籮なれどもいまだ詳ならず又四声字苑を
引て答箐は小籠之漢語抄ニカタミといふ
と返せりカタミとはカタミといふ語の略しなり

之中多くは上古に總て竹籠といひしか
此總名之舊事紀に密閉に今の竹籠之と
見えしは此之後の人篁の字を誤りて中多
ことゝいふ之舊事紀には大目麁籠といひ無目密閉く
いふあり又の大目麁籠は風のわたること
今俗にメカゴといふものなり又無目密なるは目なかりし
くさのあとを塞ぎて造りたりしなるべし

已上竹器

東雅巻之十二

飲食第十二　筑後守従五位下源君美撰

飯　イヒ　古に讃岐名飯依毗古といふ例の係今に沙

によりて飯をおもしみといふ也けり飯をイヒといひ

ひし義はいまだ詳ならず倭名抄には唐韻字苑等を引て餐

饙は一蒸飯也漢語抄にはカタカシキノイヒと

いふ史記の廉頗が傳に見えし強飯をしきまこハイ

ヒヽといひ唐韻の餌ハ雑飯也と云ハカシキカ
テ揚氏漢語抄に齋味ハ麻油炊飯也と云
アフライヒヽと云和名糒ハ乾飯也と云ハ
ホシイヒヽと云之を約しつコハイヒヽといひホシ
イヒヽといふものと飯を称今もありと称ス
不詳或人の説に飯をイヒヽといふハ炊飯の詞也古語に
云ヨシヒといふ飯ヒといふイヒとは飯を炊食
するといひしといふ是はもの總に元物の變するをモヒと
いひ變するをカタといふカタとは形をまといふなるへし

米麨の飯とカタカシキといふをも或カタチカシキカテとよみ
も穀蔬なれはまさしく糧炊なるものにあらすこれは古説に出の
糧てうちるとカテといふ之されは糧の字亦通してカテ
とよみしなれは粮の字通してカテといふ事もあるへしかしきカテ
といふ別にきこえの義ありやあらんうたかはしきものなり
なれは

粥

カユ 倭名抄に唐韻に饘は厚粥之といふカタカユ
四声字苑に粥は糜之といふシルカユと通ふ也
又カユとは淡湯也白飲をユミツといふかことし ユとは
いふは粥液之淡湯といひしは概今俗に重湯と

又さとくはうの事カタカユとは黄米作糜にて厚くし
て濃きをいふなりシルカユとはこれを薄くして汁の出
きたるをいふ又庶韻をいふ糒糯たヒメ或説
よヒメとは非米之非米之事と注せりこれ今ヒメ
りといふもの也糊ふくりといふこれも粘するを
いふ之説文にも糊を黏之と注せり凡物の粘するを
注せるなり下字集にはかの字粘くソクヒスナといひ黏之
と注せり七月ひし不の字によりて是有原粥あて此を注

以庵和若薬依也と注せり　玉こしといふ義不詳今のことき

も羹とは見ひれ餅とすへく　菓子和と作へきこと

粮　カテ　倭名抄ニ考声切韻を引く粮又作粮カテと訓く

行ニ齎食也又儲食也と注せり　カテ之義ハ不詳

粉　コ　粉をコといひコナともいひしはこも細なるをいふ

之倭名抄ニ説文を引く麪ハムキコ也麦末之粉

ハ米麦細屑也と注し　俗ニ云葉麪又湯餅河漏子

なとのことき　ものを麪といと

以之ゑおもふに小麦蕎麦なとの粉をもて作りたるを
麪といふより溲して作りその後切りたるを麪といふへし
此のゆへにこれ麪とは唐の倉廩俵をいへる大豆麪
麦粉をいふなり
白くめつきといふに注しけるをみれは義をは得
也凡正字通に麪は麦末麪とす麪作之曰
糗同物異名麪以物成之香臭故糗从臭从炒
省也と見えたり麪は今俗にコカシといふもの
之大豆麪也と記今れ不詳　壒嚢抄に大智律師観経疏を引

て麨は即乾飯屑也と見てかゆをホシイヒの粉なりといへると
いふ此説のまさるへし今は只乾飯を磨作りてホシイヒと
いふもの又大豆麨をマメツキといひしを大豆を炒りて搗碎
きこなしたるは今俗にてマメコといふものなれはやさき製洋なり
粉もいつれも
おなしことなれ

餅

モチヒ　倭名抄を引く餅は今糯麺合葬之也又モチヒ
といふ今按るに麺は麦粉にて作り昔の俗凡
物の粘なるものをいひてモチといひ糯をモ
チといひ糯米をモチヨネといひ餅をモチヒといふ

まつ此漢之字あれ糕餻如類をもいひつべくはなれ
どモチヒといふもモチヒとは糯飯之名也とは糯米也
糯飯と摶て餅となしぬるを俗にはモチといひ又カ
チヒといふ又カチとは搗飯之漢に粢といひ説文
に稲餅也といひ集韻に飯餅也といひしるき
又ころり糯米麦粉等をまぜて合作れるをは
あるは倭名抄には飯餅類に粢の名を收めり

餅の字読くモチといひ釈名に証とし見ゆる

さき代には今いふモチをモチと記せるものありてやあ

らん又古れものゝ今よりからさるなれと漢字

を借始より餅の字を借用ひしく読くモ

チといひしには倭名鈔にも餅の字読くモ

チといひ又モチ字義を釈せしには釈名

をはおもひしとおぼしく釈名によりみえし

ちまきとはなり風土記ニ拵糸ニ糉たれは菰葉
裹粘米以灰汁煮成尖角如椶櫚葉心形とえ
へけり高坐の作ニは菰葉をまく作と裹しは
ちまきとはいひしと作ニは飯をまきあはせ糕
餅の類も菰葉をまくつゝみ煮熟せし故
ちまきといふ也

饈 クサモチヒ 倭名抄ニ饈須くクサモチヒといひ

文徳実録にいへらく嘉祥三年五月云々今茲三日
不可造餻以為母子也とありさらハ仁徳
天皇の御母子崩しぬへきよ此讖にハハコクサ
と云は鼠麹と云ふ草也荊楚歳時記に三月三日とり
鼠麹汁蜜和為粉謂之龍舌粋以厭時気
もの云ふことさしハ古の時よりはハコクサとよへる草
餅にて蒸るなるしと草餅といひしく今此

又餅は艾葉を加へてひく草餅ともいふ也
倭名抄には鼠麹とみえしに蓬蘽とハハコと讀ませあると
蓬蘽も鼠麹もおなしく一名にして二物也鼠麹は今も
俗にハウコクサともハウコともハヽコとも
いふ艸の称せしなり
倭名抄飯餅部に
楊氏漢語抄餅などを引く糫餅は形如
藤葛名之マカリといへるとみえしは形の環めさ
らしよ曲水形といふ也結果は形如結緒此間
又有カクノアワといへるとみえしは古流に果を呼

てカクといふ字は是を略す之アワは縄之

後の俗カクナハといひしを縄を結びし

形のごとくなるをいふ之索餅ムキカタ一に麦子

といふと見えしは小麦粉をもて作れるをいふ之

煮餅とも見えていふ字形のごとく歓ふ当は以米并

物名之或説云一名在当て役ていふ之 这上揚氏の粉説に出て可之粉

𥹋とも以米為之といふ今按ずるに粉熟也粘 月秋

を俗にへツといふもの形これ也鉛鉚なともいへる帽といふ
異の形のまゝなるをいひ又俗にサモチといふものゝ中に
も形うるものあり鐸俗にセラ之俗に花瓣といふものを
似く鎚にも俗に芋の子など云ふものゝまゝなるこれらみな
其志るしなれば此なとは美術にしてなほすくなきも多くさ
らなるもぬりの前銘あるなをあらし御まへも制の出
ぬいひめつる也
見しかなし

麴

カムタチ 俗名かうし 穀を以て麴を將也 醬之使
生衣朽敗也 カムタチといふは セリ カムタチはカヒ
タツヒカヒゝ 猿之タツは起之 蒸して飯を室に入

て殕の起らぬうちといふ也齋頭に酒を醸すを
カモスといふも麹を蒸てカヒさしむるなるへし
これは藻塩草にカフともいひカヒともいひ黴カビとも
以上皆糖頭之殕也倭名抄に四聲字苑に
殕は食上生白衣といふ今按まるにカフといふと
語しきりきこゆるとはあしてカヒといふより自と
もしかれをといふはもかしれしにも知よりうく

或ハ黄なり或ハ白きを名に用ひられ麹
みえこゝに黄なるあり白きもあり紅なるもあり
也然とハ黄なるをもつて正名としぬるハ麹
麿といふ名も黄なるをいふ也今紀に麹
也ハカウチといひ麹麿也ハキチンといふ也 梵語
加迦毘羅といふを漢にハ黄色といひ又名劫畢羅翻黄
色といふ 迦畢羅 劫畢羅 劫畢羅婆子ハカヒルといふ詞におなし
こゝにおもふにむかしのおしへのことくに酒をかもすにもいひし
ところ也仏典伝はらし以前よりむかしより

蘖

ヨネノモヤシ 倭名抄に説文をひく蘖はヨネノモヤシ牙米也と注せり古の訓は米本は芽とも
カヒといひ又メといふ芽の生ひ出るをモエといひしを將漢之方某集にモエといふを
用ゐしと志らせしかと記されし萌は字儀にモエといふ又はあらくモヤシといふなるをもて芽
をもやしのといふをメといひモといひまたエといひ

やと云ふ名物號るもの也

飴

アメ日本紀に飴をタカネとしてよめり倭名鈔には說文を引て飴はアメ米糵煎也と注せりアメとはアマキといふ物略してアマキとは甘之大味也其にを云也又本草を引て千歳藟汁注てアマツラといひ本草和名にも甘葛之と注せりアマツラとは甘葛也アマ今飴にアマといふ名を

糵もて造る餡なりと記し合せたる制不多とれ
倭名抄に見えし飴は今は
汁飴といふものと見えたり　甘葛煎なりと記したり
此また頌文を引て寒は餳甘餡之條にこ手
といふを證せりこそは文字ありをあしく咀ひ
し之古の抄に甘味にはむ飴して寒を用ひたれは次く證すれは
餡まし甘葛蘗のよきを用ひたりしをきれは
又今世の人多く蘗糖と通用せぬまてそれらの物をも
用ゐさしぬものとはなりけり

酒

サケ素盞烏神大蛇を斬りたまひしより八醞酒を

造らしめられ天孫の御子生みましゝ時に汁吉田
鹿葦津姫天甜酒造られしことあり舊
事記古事記日本紀なとに見えたれとも国史等不
詳ならへきすみこそ姫をも志ある人ありし故繁
栄せし酒をサケといひサカともいふ又サカユ
といふ詞の酒宴に皆人のさかへ楽しむ故なり
酒はサヽといふも同し詞 今俗に酒をサヽといふ
これ酒の略語なり

琉球国にて酒を醸すなり　彼風を泡盛と名てしその
よくあることにいふ事ありし　琉球国の人にあひしと
きかしことも酒造ることにつきてひくきを須と辞てありは
世にいひ伝へ泡盛は あしくしするきてるあり
けり 彼風を泡盛と名てして泡盛と名けり　古の俗にいひつたへし
所を出し　激といひつたへたるは素奈島外の外国まで
にて八醞の酒造りをし
かいふは及てより　俗名称に写字苑を用ゆ
醨をコサケ一日一宿酒之を低きものは薄く淡く
醇をヨサケといふ　又濃くアマサケといふ　今家
解に醇を甜酒と以て見て見しよあらかるの

見え又倭名抄に陸詞切韻を引て醇は酒味
不澆日本紀私記に甜酒讀てタムサケといふ
今按するに醇の字を用ゐしは誤也し書紀
に所謂天甜酒といひしは神吾田鹿葦
津姫の天孫の御子を生み給ひし時吾田の狹名
田の稻をもて釀したまひしにて今案解に徑
せしかとく此今のアマサケといふものと同

一 みきハ酒之古名何よりも漢字ハ真ニ
よろしくタムサケと云つ事ハ(一)さらにふと見えず
れさうの甜酒を唯ひとくタムサケといひし家
此ことさらはとくに國あぬ文倭名抄玉篇
に云醪ハ汁滓酒之漢語抄に濁醪モ
ロミといふ説文に云醨ハ醇未醸之漢語抄にカ
スコメといふ倭名ハ糟文といへりモロミと

又ハツクリアヘセルサケといふを酒せしは齊すも
説文ハ醞酒としるされ古事記ハ八塩折之酒
とあるもこれにて此説といふ也日本紀
又ハ醞酒とあり紀ハ八塩折の酒といふを醸熟
せし酒と注せり是ハ酒に麹を和して醸
これかくのごとくする事八度にするを純醇之酒
なれハとそいふなりされハとハ八醞復醸酒なれと

今世上日用之字をいひて一体といふもの也と
古きを八分なるもの之にて古老の説也と
いへり又瑞氏漢語切韻を用ひて確なりとしカス而
而甘之を說せしハ方今紫藤氏はこきといひ
て白而の字を用ひしもの也諸を用ひて確へし
此一行はエツロといひて而蘭之を說せりエツロの
義にて洋語文を以て精とカス而漢之を說

せうカスの義也又ニ滓モソロといひミツレといふも沙滓なり又今ミツレと
いふ酒の糟也割なるに似たり糟粕二字共に濁くカスと
いふを説文に糟粕を酒滓といへるによれるなれとも説
文に盪糟曰粕と見えしかは糟と粕とはかはりて見ゆる也釈名
云はく粕久醸而成糟酒既盡而名粕粕魄也言米之精魄浄
盡将就魄存也と見えたりさればカスといひしを粕と
いふらしツッといひカスといふは惜語之白酒をシラカスとい
ふこと之れを不潤久しく醸して ますく地主の須とり
糟とうるの義に似たり
くれ非穀而食謂之肴亦作餚肴はサカナと
は酒之すとは古語魚菜をいひし總名之サ

カナヲ以て酒を作るといふ是コクシモノ也義ハ未
詳古語魚をも菜をもナといひクリ魚菜の字ヲ
読くナといふ意は其の人菜をまうけ其をさく魚
をマナといふ
ことく意也

漿

ツクリミツ 倭名鈔ニ漿 読くツクリミツといひ俗に
コンヅヒといふと註せり 白飲 読くコミツといふ今
按漿の名義は其ツクリとは造也ミツとは
水也コミヅモヒ 丸義ニ浮とは膝 読くコミツといふ

アシコミツ之古の代よりは主張以我國ありし時に
あさしくゝ他遺據之に於て精粹をかくはてこの字も
未醤ミソ俗名敷漢紙縣をつくる葉勝はミソ
今按辨名之御段同し但而義未詳俗ニ味噌
二字を用ゐ味宜しく未通俗文ニ未揃蒸醤なり
末に搗蒸之意ある事を未を説ときく未しみ
將く味とおほし なり比般のてらさき

かゝりともあまた此を漢流翻辨笑灑写
此ハ地蓋よ高麗猿を唯ひくこゝとしひ
しはつれ芭高麗の方言よまなひ也雞林類
事よ據るよ猿曰賽祖と見えたり　宋の孫穆撰也雞林と
まして新羅の別名ありて
傳へゝる據地とらえちらしぬ彼土に此方に倣ひ造
ましら亦みましても名とし彼方言よなりし
さくはひなるく日本寄流にし御ご書にも承し

て膾とは孫河といふ事をあらせてこれ此く
はさを摆ひし人此名を未詳今のこととし翁雖此儀膾を
惟するを称ふ此くくしといふ也未詳此字を
和銘合工しあらさるへし何ら家重候得是家に
此方流之をもて改摂へきことわりなきとおも
ひ也人倍より承ることなといふ家流の事也
膾　七ニ木　倭名抄四聲字苑を引く膾字を鹽

瘡

之ヒミホトモ以上別ニ唐瘡ありと次しらうヒシ
なしといふ和名抄に楊氏漢語抄辨色立成ニは
毛奈瘡とミツといひ漢人之書に鄙林
あしては瘡を瘡祖といひ都あしても瘡を
疥かさといふ毒しられもミツといふその
く瘡也しまたは痘の人もかし瘡もミミホと
いやすれもこれもミツといひしまふあり祠

文ともすへなとしとひことゝいふも勝れたるにこ
ほとといふを取りまとふ福を開きを呼ひしくなと
へも芭蕉葉花なといふものを紀漢子かき
てはいせうたうたこたへといふを客の旅によりやせは
ともこといふかこととふこを初ちの言葉携にて
も破寺の方ちらくれこそといふをかまつ我
水波ところおとひしと遊文度猶是製よ

微ひ遊もつものゝ如しと思ひくこゝろ兼好包と
峰ふつは彼出れ方云みましなとといひ家法
あく遊むつ物をはとこふといふつよりし
か法令のこゝ紀はこソといひとこ出といふ紀
よう用へさへあて未熟れ字を用ひく語く
こソとかし熟の字語くとこきとはかされ出
とこれまりしく後こゆとしいひとこおといふ要

ふる詞よりうつりて此の物の称となれる
名を醢といひけらし 今の世にも醤にはあらでをも醤と呼ひ又甘味噌などいひし
味噌といふものゝ如し 御倭名鈔に爾雅注
醤の制にちかかりけむ
等の注を引て肉醤魚醤皆謂之醢醢と
ししびしほといひて注せりされば魚鳥の肉をもて
あるを醢とはいひけらし ししびしほといふへきよは
いふ又及ひに又呼ひくすし モリといふこと他

た魚醬といふは魚之しといふた鮨
ありて說文に魚鮨の字注しておしといふこと
説なくしモノとは也し鮨をよむへしといふ事は鮨の說に見えて今俗に或は骨
あり或は骨なき並也して久しきといふ久しき上に鮓研の
字と見えたり小魚の乳合研字を入鮨年ていふ大きこれ鑑れ
乳をかくあかし　漁まれ新式にみえし害魚契汗をしく
契けれは字注しカツヲイロリといふを注せりカツ
ヲた魚名之イロリとハ今俗にニトリといふもの

酢 又倭名抄ニ酢又作醋 又しいふ 陶隠居云俗

呼為苦酒し今按ずるに鄙語に酢をカラサ

ケといふは此故也酢を俗呼ひて又しいふ

字音をよめるにやまたしぬまたと酸をまたいひ辛をカラ

といふ事を記すも不詳 凡五味を以て五味の名

只此ハ不詳なり

塩 和名抄に塩 説文之本 初より塩といふ名あり

しほとは其の白きによりていひ 或は

古の湖の浜と傍名けて陶隠居士か箋注の曰
鉛を引くかいしは人常に錫と混し又謂當
錫金鉛の是鉛を引く今按るに錫呼是鉛
日鑞鉛日本紀和紀又鑞鉛をきタしと云ふ之
と称しなり白鉛白則金鉛白して ワと云
白法之毛脆てふらふ之是鉛をきタしと云
はきタハ塩せしをかけ是をもてかタとしむきタ

とりふさき紙の形せしむくことにてかつれ侍し
さくて長の時銅をはかりめといひしを長さきてきて
いふなるべし

蒸 ムシモノ 倭名抄に雑纂を引て漢語に蒸也那須
ムシモノとして蒸は玉篇に火氣上行也と
見えたり 凡火氣上行するをいひ
ムシともムスともいひし義ふ譯

茹 ユデモノ 倭名抄に文選註を引て 霍茹をしるす茹

猶く五テモノといふ也内則注ニ楡ヲ爾滫ニ
肉菜湯中薄熟出之とみえて うすきは五テ
モノとは湯より出ぬるものをいふべし

蒩

ニラキ倭名抄ニ説文を引く蒩はニラキ酢菜
也漢語抄ニ楡末菜といふ 注してニラキ
ニラキの物語之ニラキとは則楡樹之古の
名なれは楡皮を搗く粉となして菜にも羹

あへ和して食ふ或は年中雑汁菜并羹
等料楡粉ニ見え倭名抄にも楡菜醤
みとも見えしこれ之葅とは漬し楡粉とを和て
漬しめる菜蔬也又此名は阿へニラキとハ
いひし也又令の儀は唐韻としいふも古は葅とし
ひ後は辣菜といひし也此 或は葅を造り法え へしらう此京都には
楡の字仮写して楡とみせしわり辣菜の名は下学集
にみえたり葅を後は辣菜といひしも縁起

ましニラといひきといふ名の五辛菜にてしきと忌しく
かくいひしかれを俗に香物ともいひしは五辛菜を
クサモノなといふよりて云ふ称を再用して香の物と
そらひしと見ゆ

齏

アヘモノ倭名抄に四声字苑を引て齏はアフと
いふ一訓にアヘモノといふ擣薑蒜以醋和之と注せ
りアフといひアヘといふは齏須に和の字を讀く
アヘといふかくアヘしは此之辛辣の菜を擣つ
あへく酒醋に和しよつといふ 薑蒜を擣きて醋に和して今いふ辛

といふものこれ日本寄語に羹を水諸といふ
と見えし是箋之玉篇を引て臛もイリモノか
汁臛也と注し又周禮注を引て餗もコナカキ
鼎實之と注したりこれも注也そのことをコナカ
きといふ義なるへし詳周禮注疏記名に注し標
るは餗を糝食と見えしより糝とは米粉
とをもて肉羹に和しぬるものなれはコナカ

又膾の字を注して細切肉也凡牛羊魚之腥聶而切之（具）
為膾といへれハ膾といふものもとこれ魚のミ限らす
こそあれにまれと膾又作鱠ハことさらに字をたて魚
ならぬ魚膾をさしていへるに似たり・京師なりし人
記を注して眞説ハ七五とも書て今俗にへうしといふ詞之
切ら作ル字といふなるをこれへともしからさき

鮨 スシ 倭名抄ニ爾雅注を引て鮨ハスシ鮓
属也と注せりスしとは酢之ハ詞也魚を塩
もて仮し塩と飯をもてしてこの味の酸きをせ
しものなるハかくなつけしと鮨を説文

て擣りて薄き魚をいれて夾しつゝ

䐈 カスモミ 倭名抄に四聲字苑を引て䐈はカスモミ

糟蔵肉也と注せりカスモミは糟之モミは揉

之糟をもて雑揉して肉をいれ之式に糟漬

ありしなるへきの乾之

脯 ホシイヲ 倭名抄に禮記注を引て脯をホシイヲ

乾魚也と注せり今義解みえたる乾を脯ト

割乾魚腊謂全干物也と源しるされし倭名抄
又は漬經の後に操りて洗て乾魚とはい
ひもの又遊仙窟を引て魚條謂之スハヤリと
いひ本朝式には楚割といへり古語に
細きをいひてサといひ又サといふとそれ
を用ゐて呼ひてスハといふ木の細枝をス
ハエといふことそこれなり

古語には細枝をと
サエタなといひきり

又鹿読をおく炒債と火乾之漢語炒ま
炒債魚とヒホシノイヲといふ飛は火旱と
いふ也火をもて乾しかためたる也又古く干鮭といひ今ハ
鮮干といふものゝ如き鰕夷之地より出せる干鮭
とカラサケといふ
ものなれぬる乎綴をいふ所要魚之名にかあるを
ミサミ一川ヨコテヲサミといふ也と読しるすミサミ
又ハヨキ魚之氷魚をヒヲといひ中魚を
カツヲといふかごとくなれハサミハ剰之意今目

判ろしいふなる也ロ干といふ為辞

腊

きくも倭名抄廣韻を引て脯腊は乾肉之
きくもとよひ又説文を引て脯は乾肉也おし
としいふを語にしふも同しひし説もあれ共
よこれ乾肉なりとこれを呼ふなれは同しくしぬ
すり詳なりしは今義解なは腊謂今干物之
是てきくれもこれをも考しる当腊のすなる義也

月之條倭名抄に鳥獣の肉といひぬ是にて今年

をいふのおもむきを是なれども周禮の疏に

肉脩を釋して加薑桂鍛治者謂之脩不加

薑桂以鹽乾之謂之脯とみえたる事也此

古語に鍛治をもてカタシといひしにこそあれ

を略くまでといひしく後にはキタシとはキタ

ヒとしいひしかカタシといふ語の残せしなり

腊とキタヒといひしも肉を乾して製の
疑しけるをいふなると漢に蝦腊なといふ
めしなとしも見えたりホシゝとは乾肉
くホシゝといふは肉をよく乾せし肉なれはホシゝといふ
ホとは又火又之日に乾しけるとはヒホシといひ
又日之しは訓しけれと倭名抄に脯なりといふ上に
注せしとく見れて今もいふ所のものなれ
まるい倭名抄に肺説を引て脯の字須久ホ
シトリといひ倭に干魚の字を用ゐて須せり

閑院の頃まて薄折田晡と見えてくゝ此

香膳をのこいふさる詮も見えれ楊子房云

まに香膳を膳といふなれ見えてくう

乞上飲食